国立国会図書館　タイトル『源氏物語』 請求記号 856-10

ガラス使用

856-10

源氏目案巻第三

よ

一よのおぼえにも　御門の御事ハ何事も末代まで記すゆへに　一よそふらく　何ヨリカヨリ

一よ色好り　綺羅錯綜ニ記し　一よそずハ　不讒ヨリセズハ

不善（フゼン）　あしくせぬとふんで

一よろづさまにたよ　さまでもなき事にても

よしばうしきこと宿ハたつくの法よ

そうぞくすれにて家もまた何僧家し

一よるぞ　道の為ならじとくろそろあり

一よこしまなるやうにて　理（ワリ）をしそへ人の

毛ながくよまで死するをるし

一よるの御とだ　夜居（ヨヰ）し　清涼殿の夜居

夜居ハ南ハ大せまく一間なり

一よ人　よの人との文字を加へてよむべし　捷

多くの御諱（イミナ）　世（ヨ）仁（ヒト）を用せいぞ　是れ有題

国立国会図書館　タイトル『源氏物語』　請求記号 856-10

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『源氏物語』　請求記号 856-10

ガラス使用

一うつくしうまろうたい方すし幻術士が
名し玉のおりもとに実衣の裏のをそを引
一大浪のまま蓉未央柳見を根に大浪は
池のなし芙蓉は蓮のなし未央はその名
蓮花柳よ楊平花をそくくり
一大家なのおりの 楚中は大家をおとして
有机を二そく 伴膳すゆる也是は帝に
まつる借なし おりのは口落をや也
一たいくさき 退子葵一たいよろそ 不澤
一たく人くうそうよろし 梅改開白をも
帝のひとよりは兵人とのなし 家主の
多根よりは帝をこうぎ 便
一たくあづき 縁し そあるは 借し
一大きそてはば人のおぞしそぎ
いくくり 一白根といくもの
女のおをよびはなりそうたそう

一七そのそうもそうもあるよそのれ
一たのあそる 形し そそぐれ
一たそくそくそそくしは助ぐ
一たどん人 多なる 一たうがを 鼻紙し
一たゆそこし 形弱やそあるり
一たそれ指でそぐなそ名を
一たゆそる 面まあむはゆし
一流口あうりのそれ 楚中そて流口の名
出ず外人表おうりそそ院そて
表者ておそりて原の書の者を流口と称
一大そこ 大御し指の 一れむけ そ
ふうくなる称し 一大名のなそて出
のる大臣の逢 系図 一代その間のつく
描ず国そ 国司二歩て五年あよりそし其名
ぐそよ係よいわそとの指けいぐる毛

国立国会図書館　タイトル『源氏物語』 請求記号 856-10
ガラス使用

一大納言兵衛督なども一つ二つ参りたまふ。
あるじ方よりありあけの月にさそはれ
さそらざらむもあかなむとて一二こと
まろびやすきほどもうちとけたるほどの
一大納言ゆかしうらんのもとに地下のぶん
参りたまへるなどの例 先礼記曰 鐘鼓琴瑟
琴瑟在堂 今宵又数に必ず参りたまへ
とて 仁寿殿五年五月廿五日 承上競
馬六番ノ時 生上自 打二大鞠一 結ひ時
置二壺上一也 一大弁 所 参りたまへ
女房などのある方へ 一なをやき 婀娜 北窓
一ひんめりて 参る会 先第一 儒者奉
仰 献題 次書二韻字一 盛中境二置
庭中文台上一 近衛次将 先探り取
韻二字一置 二台盤一 昇り 自 滝口 陣
韻二字一置 二台盤一 昇り 自 滝口 陣
獻之 次 王卿 堪能文者 文人等
各 進二文台一頭 探二一字一 見之 事
皆 性名及 取字 也 今宵探韻ハ
名一字 詩也 悉韻字 ならひし 故 懸
紙ノ説 依二云ク 春日同賦春夜翫
探花 名分二一字一 応製詩 探得 是字
可レ書也
一大納言 大将ハ
参りたまへる 参りたまひて 参ズル 縁也 源氏
山ハ名ノ 後大納言 宰相 兼大将ノ 例!
名ノ字 所 前ニ 参ル 常ノ 作 一 茶 指図
一大納言の 参りたまへるなり 参る後二人ノ
内一人ハ 参上 其 時 大納言 参りたまへる
菓子 上ノ 台ノ 折敷ノ 事 ハ 源氏 物語 ニ
もあり 又 参りたまへる 人々 ニ 被レ 勧
一なりけり 一なりけり 一なりけり 撰
薪及菓 随時 肴 取 興 提 盤 ニ 各
一なりけり 一なりけり 一なりけり

乗り渡る雲の橋とも見ゆ。唯是一面行け
ども不遂昔
一たけある恒立樂
三間新草堂、石階松柱竹籬籬白氏文集
一たぐのごとく彈琴後漢書、梁鴻
能彈琴春秋胡安
一たうるごとくうぐひすの谷より出でて
一たなものゝ如くなりぬる玉裳を、
後撰、思ふ事、女の名書をぐけり、
裳ハ女のそれは袴を一たぐごとの白よい右一
大臣の四女、舞子のいりたまふ、事書、
とかいふ後ろさの名也一たまふ天皇、乗物奉
るよあめつぐ皇太后宮にてゆのごとく
ぬぐ也河は本朝、太上天皇ハ持統
より始む女帝也、前帝の女院のそれぞハ
持統ノ例ごとく花宴、ハ後ろ
つゝゝのごとく院ゆのゝ一条院なり。

大上天皇のそれ帝とかゝず、位封
年官年爵等ごとく、皆ハ封ケれ
ぞ、ふつゝかゝし、封ごとく封ごし、
三ぞ六名ゝめ百戸ゝを太上天皇ふ
ぐごとくて、ゆのこゝりのし、院司ハ
別当ごとの事つゝゝゝ別当代、全典代
ごとく三ぞ人、太皇太后宮、皇太后宮、
一たごとの如く一ゝゝ類聚
ふぐつゝゝまでりゝゝ、民部の
卿ゝゝゝして同音、せゝとゝぐ
如し、河陽ハ振多し一玉ぐつゝゝ
ゝやゝゝんへ、拾芥言、道祖神も此ゝ
あれも也ゝゝ一降ゝぐゝ
女、良女ゝゝゝゝゝ
ゝぐゝもゝて、塙の壁ゝぐゝて
あゝゝゝゝ。

国立国会図書館　タイトル『源氏物語』　請求記号 856-10
ガラス使用

河　蘇秦物語のまゝにいとしるし花のみ此中納言云
抄物の有ごとく寿昇竟になかり
すゝ女のまねして　一作とり抄にかゝれし　抄は
一御殿　かたへあるをこそはいはひぬとも也　貞観十八
年二月廿五日以淳和院為大覚寺積翠
にも御殿あり　一なまめかしき門ゆるし　裸
女人のにあひたる　裸衣の玉手袍とて王と
ならてはきぬ事　女かけ事しきなといへる
一大かくのせうちう　西三条大臣良相公八関院
左大臣冬嗣公の五男也　大臣の息
大学の允とある某例一大納言内大臣にのぼりて
内大臣桃園例　堀河関白　忠義公　兼通　天禄三年
十月廿七日内覧　同十一月廿七日　晴くは例
わきまへてなる也　一辰ノ日の節会つく
つかさ　十一月廿ノ日より始まる節会
五日のたり臣也　位上ノ兵ろすも有例也

廿日の舞姫参入　寅ノ日ハ五節所のゆるし
卯ノ日ハ童女御覧　辰ノ日ハ五節ところの御前の
節会の日也　辰の日の節会ひらくとある
ゆへ不審也　五節節会ハ同中ノ辰日
なれは五節のあひおりのまきれて召なれ
てあまたるを　一たりかされつる
うつり　作者　年ノ友年爵より
一大学の式その日　進士謂曰可進文
爵禄者也　聖武天皇神亀年給進士
識帝王系図進士及第例　以下同弄二勘　略之
数ゝりあかれつれも進士とてあらし以ても
のゆへよりのかしこねともらう付候也
一たまのげん　河　大学寮　一条頭　助　権
大允　少允　大監二人　小監二人　大典　大属
寺ありや少允　叙爵之時　小輔とも監数
爵のは大史監とも申す　大監ハ正六位下

国立国会図書館　タイトル『源氏物語』 請求記号 856-10
ガラス使用

小監ハ従六位　兵大監ハ正六位下相当
次官ハ従五位下ヨリ叙シ奏スベシ
一　左右ノ大舎人ハ若干人
一　左右ノ近衛ハ史記ヲ写シ堕弛ヲ誡ムルヲ
以テ要トス　一　左右ノ兵衛ハ
弓矢ヲ執リ威儀ヲ整ヘ
一　左右ノ衛門ハ
門ヲ守リ非違ヲ検ス
一　左右ノ馬寮ハ
馬ヲ飼ヒ調ヘ
一　左右ノ兵庫ハ
武器ヲ収ム
一　左右ノ近衛ハ
六月十二月ニ射ヲ試ム
一　左右ノ兵衛ハ
六月十二月ニ射ヲ試ム
一　左右ノ衛門ハ
六月十二月ニ射ヲ試ム
一　左右ノ馬寮ハ
六月十二月ニ射ヲ試ム
一　左右ノ兵庫ハ
六月十二月ニ射ヲ試ム
一　左右ノ近衛ハ
六月十二月ニ射ヲ試ム
一　左右ノ兵衛ハ
六月十二月ニ射ヲ試ム
一　左右ノ衛門ハ
六月十二月ニ射ヲ試ム
一　左右ノ馬寮ハ
六月十二月ニ射ヲ試ム
一　左右ノ兵庫ハ
六月十二月ニ射ヲ試ム

一　左右ノ近衛ハ
一　左右ノ兵衛ハ
一　左右ノ衛門ハ
一　左右ノ馬寮ハ
一　左右ノ兵庫ハ
一　左右ノ近衛ハ
一　左右ノ兵衛ハ
一　左右ノ衛門ハ
一　左右ノ馬寮ハ
一　左右ノ兵庫ハ
一　左右ノ近衛ハ
一　左右ノ兵衛ハ
一　左右ノ衛門ハ
一　左右ノ馬寮ハ
一　左右ノ兵庫ハ

国立国会図書館　タイトル『源氏物語』　請求記号 856-10
ガラス使用

一ふところて脳　又燗一さけさらにてもさらにても同おなじてある人
一これうえ　ふい行ゆきのおの雑煮をつくるをほめいそのみやそんをとりてみもとへ
ひとつぼの酒と清補の袋まよに平
一たこく大曲　一さそえてんえ
ふいこくさまれば狩事の酒みやこ其外よ生ものそのできんとうそれと
一たこくらさんこん　探菓子粽茅萱ふ菓子
荒随時　茶敬よ　新ふめと荷て
新人の仮うて　日声明よひとりの
一たこくら　探菓　汲水　拾い新設食
干時寿事経ふ感ふ感ふの当

しりあこくさて新ふとふをこめて
ハのうれ新ふとふ　一たえあこくふ
こくふ新ふけうよハ佛入滅ふれ
常在霊鷲山のんもあり新我
生々見諸仏号恒沙仏典
なうふまふ別てこそうも
一むーのよ　法の意　ふのうにんふ
一竹川の竹川の曲をうふうて
ふうふ竹川のうふてあるゆえ
せめこくふうて
一行川よ仏法ーいふのとこ
めこくふうふうふこまうふ
ふと早ひやう　一たうふんふ
あふいふをふのまんとふのふ
一たうう　多とうふ墨　神祇令水桶
紙源抒ふうう　一孫のこうう晨鶏

国立国会図書館　タイトル『源氏物語』　請求記号 856-10
ガラス使用

并明後月渡・征馬連嘶行り出づ（白氏文集）
一たうのそこ 省いかでくなてもあかくさ
今ハ禁中までも葬ハ京より王南
階よくりて送れるくれ 揃譲の作
法也 新大納言の経かえよ 笑い来学
自れ直衣下ぐさねめづ〜さ
一大まうりやれ 大まうりくと言ひし
ぐりい辞し 一大内記参籠
一たけのふうそよまうまうよ
でさくさ句し 一たけやもふ
梵天帝釈八人ろとつさとろ天し
帝り天八切利天主一ちろ孔 摘質
わろいんてうくでき事よう首をち
のぶ涙よらいの 一枝ぬさくこの
ゆこゆくのうろうぬいて埃よ
楽生あれと 一たけふちちりく

絶のあるうぐを和ぜいつさてくう
一玉よさす 珀毛詩一ちろて 歌ぜ
中をを断絶さくろ物をーうのし
一たまの 殯宮見葬礼記式 殯会稽
ろくろ人を当てし 殯宮まて 義生し
くろまうわ 守谷のくて 勅使のみさ
あいもりて おとのみしまおけぐさ
一たのの竹くろ 名にわっあれぐ
れ
一れうて 源氏のう 一まうのさうあさ
ぐうてんろさんせまうの例のり
一まいふぐろ月日早のひり 今日
陰陽寮以下人掌天文暦数風雲
気色 謂天文者日月五星井八宿也
暦数者計二日月行度数而造暦授
時也 気色者風雲気色也 言以

国立国会図書館　タイトル『源氏物語』　請求記号 856-10
ガラス使用

五雲のたなびくを視て其吉凶を仮十二風気に知る
其妖祥一 寛和二年七月廿日、黒雲気
廣三尺人許、起坤亘艮、康和二年背
五日白雲ノ廣三尺人許、経天亘東西
一わたりてうけさうらく 寮試若を試
みる史記をうけもつ也、よくよみえ
うらくと、擬文章生補す、次の日よ、参
議をてんぜらるゝ者の人を、文章得
業生よ補す是ハ進士ともいり或ハ
策をして勅をとぐさせて試らるゝ者、
文章生ハ補してのち、さらよ方略の
宣旨を蒙りて課試をとぐる事も有て
也、
一まいのそんでん ハ寮ハ荒ハてある
れど、例どおり
一まいのうへよ
あげまきに類をもう一わりうち玉ふ
一まいをもせめ 毎月八日、中堂にて
う
一そのうへの猪 一そばめ一そばめ
一そこの人ハをもくし、そらとも
みえりよをもち 一そばめし 悪形し
一そらづ 越仙宅 撲東 えび張のおし、
そひぶよ女まうとみえ 一そこよりて足下為
くとうづ 一そも おし
一そのそばぐやりづれを中のふうて三の
ふをとんよのし 一そひみ 添ひ
一そひうれ 猪 一そいつき 側ばし
うてのおびをとり、縦うを抜ふ
そうるまをとうし 一そのうへのり、足
よりうるみが背みてとをとる、周縁こと
一そこうそこもおれこびうをとる知
一そうれおびてそくいそめをおびてし

とゝおもくしおもふ心をみるのみぞ

ちらしはべるとぞ。迷ふこゝろはなしとぞ

ちかきは帰ることし　一そらにすみをすり

うらやましくもかへるやうし　帰来倚

杖自歎息・俄頃風定雲墨色　杜詩

桂嶺瘴来雲似墨・洞庭春尽

水如天　柳子厚詩　一そらいろにてはるかや

かのうすずみにて俗よびしとぞ云詞

一そこそはそれはそれにて逆一つに　涼の切名

そていゝせいてかゝるやうなる今はふかきとこ

一そのくもゐ　寛平ノ遺誡ニ云・今須以

除く中　金貢ニ二人除其子ニ以令当ニ

求貢ニ此哉とぞめはあれなる節ヨ

まかしとし上下略之　一さゝめの寄ぐひ

諸衛・六衛のすけといふを云おぼえて

河海抄　令曰主馬寮司正一人掌下調習

馬寮ニ馬ハ仁徳天白玉はじまる名義より

わたる神ハ倶知ト云ひしより

一そうしのおはしますめの第五　仁明天皇

御時なり　後方にも秘蔵のさる。不伝男子之

をさ納之　侍従里方二方一条の子の家の尊氏

為ハさしくゝりとおもう　能ちかくおはす。

三宮のおはしくてはつかうる心を探り

一おもじや　其ジャ・大御会の時その者とも云

するとらぶ別らとゐて可能。唐名

徳爵歯の三の内、一ありたりぞ者とぞ云り

一そのくさのみや　外典ハとをし

一そらのさしもいきのゆり　史書曰師曠

之審ニ音ニ所善　琴登之感動風雷

云々　謂琴変也。琴書ニ云　師曠晋

之平公ノ為ニ工於琴ニ鼓之暑而文

風雨為晋平公鼓感　云　鶴下集

一そこそこともなく　なにゝ見えたる事也
一よはひの雨の降る夜　一それよりさき　二条
大納言正三位任陸奥出羽按察使兼
侍従右近衛大将藤原朝臣保忠　延喜
六年七月十四日薨ス四十七時平ニ八條
大将時平ノ一男本朝鳳凰ノ元始
保忠は藤原の時代よりそれといふて
をとこ女よくよくしるしたるさまを
いふ。世間にありつきてはへるといふ事
一そゝとあゆむやうなる　業平物語ニ云
院の葬の御葬送の東の御車にまゐりて
院ありつる世なりけりとゝよけられ
て源氏も供奉一其の時八歳の童
姫ておはす。幼なりの時よりそあり
けるなり　一そくひぞの東坡
山谷なとかいふも髪の偈の

信なと謝まゝにあり　一そそのかし　中書王
大臣と申して。形見とおもひやる根ざし
めとも根ともなくし。京へ出るときは根
かくれて宮とへ一やどりぎそのこちなしくて
ぬることの名者なれば。其のこゝろがうつ
すつまつり　それそれ書生も
うまのがなれども。さみえたりし
一あやにくなり　賄賂　財物を送るといふ
ハ礼物をもて　其信のかはりやうや
一そのやましきこと　この乃ふる
一そのつれのこと班女閨中秋扇色
楚王臺上夜琴声　班女は漢の班
られたる事を。待ちては不知そて下ノ
句をもてよるや待には心をそれたるとし
白扇とあるは前なるまくらにしの事
一そゝろさむなるは　可憐病雀半夜ニ

まとゐをとりよせめり一つかさうそく帝釈
みこしをおして中ゆくをとり
一つうめ　秋除目し給ふに帝釈除目と春
除目若し縣召ふ文召料住ら事取之春
者大政官秋者外記庭に仰ス
之仍縣召石　敷陣　表八月也すろいあざ
め　秋八つきありとらいうる也
一月のすむ　雪ぬをうひて八禁中のさハ
あるず　中文のもものしまて物利　天上
あどのうだし　昼のやみといまこそ也
一つゆきういうめ　時ーてなあいず
よろこうう今のどいうことはすくうぐ
後までく事ともいろいろ　おろくいい
しくし
一つうふうき分のこ
歌あるあれば仏絵かうしれるこ
一つうり名　彩色をうし　あどうろうろ名
あどをうもぞ也一月の日のこまも
れの　月頭仰鏡無明罪　風気如八
旬不伐愁　書始一月日のひうをよ
若葉美よ　切名入名　書ひうまき
一つうーまくき　新　中宮御
倍はつきしの一つうみどさまぐ
のこどうれ多し　磯まのどいひ紙ば分
とり施筆也　一やうくよういうき
食家淨掃地と東坡詩うもこ
一つうえれとをろくる祈し　煩費
つくろのをを吹こと風も甲斐なう
ば招こ風にようてんこうりき　受法
れぐ祝ろうこうり一つひのりこうら也
学即八書上　道風八能書也
一つまーろーのこず　不当のてよ　凡
ぎしとなしうろみのゆくのこずと

国立国会図書館　タイトル『源氏物語』　請求記号 856-10
ガラス使用

一つにうちもあのにありさまなれだ
乗添を改ちるまで第一舎のの出仕
まべきさまよもあ〜ぶるあこ
一つのめあにのりて記録のまは
位ぐいくは高量するこもあ
されてすべげこいう何放逸試
一つりぐ章のごし
一つやもそも乗つやそのあまも
一つまよのやうにく花たくいおひ
こそこをくとやうにてぬぐそのう
をを一つまごろこそ乗なんの
るよ言をていう一つやるよもこ
一つさも寄も一月日うさう女の
方へのよのぐ〜今日をるべ〜こ
一つぐいもあ格の出入う餅こそ
一つりこをなれて花和大教のぐく
うあをつぐこをなれてこう
一つまくつぐこ一つくも和遊物和
内裏位洞に有一つさうちさも
一つねう〜す不書ま物るにさしぐ
こそぐ〜一つまう比弱るこ
一つて和う一経古原まを人和のと
一寄ぐさ薄のいあ出のくいせ声は
角のあをとくこう夕方ぬ
物まうう〜あこんし花中のお
文のをを比す八やこれ柳ももひれ
作文選長笛賦云蛙同六
音猿積こそ一つぐこぐ〜
唱吐虎気ありは二月ぐ向ぐ禁
も北室院の月も向ぐ新る物ぐ
ぐうこと早逃一つぐこと里逸う
れうお深あうれ探忘ののあし

国立国会図書館　タイトル『源氏物語』　請求記号 856-10
ガラス使用

一つゞら　竹川
ゆく名し　会心勝
季札　初使
剣　帯
国　未献　還至　徐君已死
乃解其宝剣　繋
去　後者曰　徐君已死　尚誰予
季札曰　不然　始我心已許
死信吾心　呉世家
一つてよう　なろうすくあと
みそ　一つを
一つものより　一月
十六月をうつ
人のおとれがりうの

一つゞら　竹川
ゆく名し　会心勝
季札　初使
剣　帯
国　未献　還至　徐君已死
乃解其宝剣　繋
去　後者曰　徐君已死　尚誰予
季札曰　不然　始我心已　許
死信吾心　呉世家
一つてよう　なろうすくあと
みそ　一つを
一つものより　一月
十六月をうつ
人のおとれがりうの

一つゞら　竹川
ゆく名し　会心勝
季札　初使
剣　帯
国　未献　還至　徐君已死
乃解其宝剣　繋
去　後者曰　徐君已死　尚誰予
季札曰　不然　始我心已　許
死信吾心　呉世家
一つてよう　なろうすくあと
みそ　一つを
一つものより　一月
十六月をうつ
人のおとれがりうの

国立国会図書館　タイトル『源氏物語』　請求記号 856-10
ガラス使用

一よのまつりことの始に祝ルとみえたり
一わか人 年のはしめ 一女別当 斎宮女別
當ハ延喜式にみえたり 斎宮別當と 一説
今昔にも院・宮・関白家なとにも別當の
房とてあり 一くら所を捨不捨
飲食器ヲ盛ニあり 一女房のまうけし
臺盤なるへし 一ねうきやうのいひ
年三・正五九月・六斎日也・天帝人ヲ
月南州ヲ廻りみるゆへ也 北辰星ニ
一子の日 元日子の日也・十節記ニ云 正月
子日・登ニ岳 遠望ニ四方一 得ニ陰陽静
気除ニ煩悩之術上一 一ねのひとこそ 祢宜言
ねのひとは文 神祈文ニ 子日なるは 賀の
詞也 正月のはつの日 吉例多し
一わかくとねのひとすくしゑたり 花
一猫ノ字ノ音 めうし ねこの 五音通する也

一女のかたもあるやうありて・河五条二条
院のうち東年月下に通しおはしますかこれも
後撰ニ云 ふゆしてをしをり源・宰相中将に見え
小松しなる元良の親王のうけ給ふ
一ねのひけさうあらはのこと 花盛の
ゆきのことをのへ行勝る祝言
つねのひけさうおはれはもやうかわりおほくて
ふるねのたよつまてひといふものまよ
そへし 其ねのひけさうはものいふねのてまし
一ねんうちより 斎をもいひそさるとかわりとすれ
専心欲願向ニ西方一 子ハ家ニ生ツ皆捨離
一ねのこのうち 餅 子ハ宮の翌夜ヲ初ル
よ傳そすへのこの餅と 惟光かいふ
三月ノ祝をすへのこともいふはねず
な

一なよ〳〵と何条しやう〳〵も却
てよびの同じ程なるよびは殿上
一ものぐるく平しと一門の
高侍。堂侍。令婦うちとよ
一くるくと必ずご一ものこのすこ
ものうん指申れのをうり。官士は除
申れよあしてんざをあてくり。
式学にこそうりまいんざりぐり
うて。よ衣つの令婦はあられぐのもの
一中〳〵くりてうくて。落よう中〳〵
うてうる一ものまめ〳〵う宿婿
生花のまめ〳〵よこのくあり矯くる
をう。世間花の守のくて。又生のうを
ものまめ〳〵うちいものまめ〳〵うく
うりまうくし一ものずしひうそ急
ものごうこれむつくし昭近

一ものあ〳〵礼一ものごりうりて
ぶとしのも指うとい清浄衣うり。常
衣衣へうよ扇し山形よ東山をよ
おつ〳〵踏指あり。山指うりありて常
へ向て尊勝一ものみし。礼をし
一ものうひう衣着し又やりうく
一ものよられ行やうやの衣うを人乃
うくうめ足八指妙うとうあ人
られ先ろのぐよ指うをとり。出人諸
一ものまく〳〵花のまくとい却のまのう
一ものうりうくるりとむつ一ものし。
くぐのぐとうまみこ一ものそ。ぐりのの日
よむつ。玉衣こうめうと聞てをて
川くろし却のいお衣にるをしををて
めすりのし一ものようやうくろし
一ものの大分よとろ心十くるものめる

一ゑふさのありさま　行ゝやとそくしみ
そでぐしぐしを心也　一ゑ・ひやうゑのかみ
一ゑまんとろく　鬘心　一ゑひげ　右ゑふさ
ぬる行ゝ人のまへの行ゝ　ゑよ
りよかよろし　一ゑそくしく行ゝ
とそくしみてうしよかうぐそくゑ
すぐさまうさゑのどりつゞ
一ゑびん　ゑもうりうぬぐり　ゆ裡ゑ
たゝ右ゑのひやうゑ　かくりうろくぶと
まりあこまーだし　二文金　ゑのよう
ゑくこのかし　天一神とそり　中神八中
央の神ゝ　ゑ神ゑのぼし
一中川のわたり　今ハ桂川と　一ゑげーぬて　ゑ
ゑりとゑ　ゑくゑのとゑりげーとそく
一ゑのそくけ　ゑゑくぐゑ　折ゑくこんぐゑのぶく行ゝ
一ゑのらくゑりゑ　ゑくこんゑくゑよのらく

一ゑぐめのち　ぬゑみとくゑのそゑし
一ゑりくゑりんうくゑのきてひとくゑゑの
とくよろぐくしのちけよ不二ゑ明とりつり
一ゑりうろよりうろへのけてぐけゑまる
一ゑゑくくてよのつくこゑとそりとゑん
一ゑげのゑでづくひゑびのゑまけ　ぞれ
もびやりゑゑのつこ　一ゑりとそくし曲
つくりのり　一ゑもたらへ　金剛
蔵王権現　ぬとゑ天地　現ぜ釈音　垂来
ゑ勅し　弥勒出生の時　地よりぐき　金を
まりりゑ神也　一ゑよぐーの院　そん
ぬゑくそくぐりつくゑ　河東後のゑ
一ゑぐりめん花　刻一刻よ　心ぜぜ
とぬゑす　その後行ゝのそぐりめんすり
名詞とらゑ　ゑのゑやうゑ行ゝた
ぐりまゑ　ゑとくれてゑのうまくゑゑよ

国立国会図書館　タイトル『源氏物語』　請求記号 856-10
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『源氏物語』　請求記号 856-10
ガラス使用

一なをあしゝはゆふつかたあしゝとゝ
一るけさうそひ　みのやあるをまひとしす
ハ吉侍そ侍て法師なとのするこもいふ
のそをニ文通メトゝくのつまをおとゝ
一ふのひめそ　本妻の服と三月ハ通
ハ東表しのうす　みひとともいまくとまや
くりんゝくの淺染ふゝくきまり
ひもゝり指るをすハ吉ひとの指ふ
ひとりてえくくるゝし　狂服よ紅の袴を
用事　定ふて作る喪よ　宮内卿　火
紙ノ上繁をゝそ一ののうくゝり
一るをゝ凡やまず　花　周成王の時　周公
旦東郊　よゝのすゝりの五位蔵人
一ふけさてあしのゆすくんたゝ
一ふ指ニの二方ふの吉ふ一拳ふてゝ
一ふ指ニの二方ふの吉ふ一拳ふてゝ
ゝ結中のよゝれ一切大臣よゝのゝ

花大納言教さゝまりて　ゆゝのん
ふるくて　指より切大臣ゆゝゝる
ゝゝ指大納そふくゝ切大臣とゝけ
ゝゝし　さてまくやゝくおゝし
ひそゝれゝ事とけさ嶽そいゝゝ
殺仕大臣とふしのし　玉光　教くゝゝり
て一部教ゝゝ　左右の大臣のまゝ
依宣國左衛のゝよ　切大臣のお送迎
一ふれそゝりいゝ門作よあり女中の
そゝゝとゝり　夕方なゝゝゝ
左近大臣ゝゝ一ふはのゝくく
花代始よ　半修善ハ那波そあり
典侍のくゝ衣とりて参ふて
解除するゝ　これふ那波のくく
の御ふり　一七日　七日ゝそぎ
今の世ゝも毎月ゝゝゝくまの御

国立国会図書館　タイトル『源氏物語』 請求記号 856-10
ガラス使用

をまの七郎とうち笑ひて、帝にきこえ給ふ。
御ぞうし　拾遺　なかれにし　名取川　いかでか
瀬とは　なりはてぬ
と　ひとりごち給ふ。
年ごろの礼のすじ、式ニ七日ばかりよき人ども有
りてあさうがへ
一ぐうぐうしき女のおられ、受領のすゞりいとひ
ろにて、男女のまどひをとりて、
ゆゑ〳〵しくもちひしをみの、ひさしあま
りのこんどの
一ぐうぐう　風俗歌
うたひたり。やうたひたり。ちゝ氏ちゝくてうたひたり。おられのうたひたり。一ばん
をとりをへて、やをとりをへて、二ばん　あなうま
うんとこもやみそうのおれ　三ばん　我が大きみ
にそ　乗不詳　やし　切ぐりうぐ
一ぐうぐうじと　中のごの海ばし
一ぐうぐうぐうとゆうぐうれて、ぐうぐう。
真衣をゆうぐうぐうぐうぐう。
宇治大納言物語

ゆうぐう流れ　御前　ゆうぐうれず
ぐうぐう　乗　ぐうぐう　乗
ゆうぐうれて、句のうぐうし、ぐうぐう
ゆうぐうれて、一段　ぐうれぐうぐうと
いの中のごとうぐう　一ぐうぐうのあやま　御前
ぐう力校之勅　池有　波文　永り　尽　開
一ぐうでしこのうぐうぐう。ぐうでこは、
紅葉ぐう〳〵番し　山のごは、ぐうぐう
一ぐうぐうもやぐうれ　菅のやひぐうぐうの
いひろよう酒と　一ぐうでこのつりぐ
のごしぐうぐうの多いぐうでこの
ちにぐうぐうる庭夜く　始い前芳と、
何ぐうぐうおまう　一ぐうぐうあれぐうく
ぐうぐうぐうぐう　一ぐうの月あれば細
ぐうのうちも浄ぐうれば私とひ私の事も
あぐうぐうとも一ぐうぐうぐうぐう

国立国会図書館　タイトル『源氏物語』　請求記号 856-10
ガラス使用

一ゆづるゝ　さてし．さる頃のすゝむの
ほど　折しも弥生三十日ばかりの
一明石のうみの面をづく　筆問ふくて．明石
の女をうらやみ　一明石もよそにはるる
ひまの　明石の中よ．尚侍．典侍．掌侍
女孺　此の四等の名を．家月ごとに賜はる．
明石のうみの面をづく　筆つどふし
一ものどてく　紫のゆかりをたづねば
一ものがめする　うちうちへうちうちにぞく
一うづの黄色　一るゝよりや中を
よそにうちもてなしぐく　おいとゞし
一ものおもひや　惟光　女よう〳〵　妻あひ
ようもこそ　一ものれそへ　あはれ
一ものうへの　八雲御抄　ものとひとるの
のぶとうた．小井ぐいにはべりとても．
きぶりのあるべくてものぐ〳〵しとて

一ものをおもふ君　多喋　源処仲　知る君
御教書　筆未有　慶滋保胤　白氏文
るゝ　ハ行の活用．御教ハ動詞　ものゝ
のつゞまし．人のまゝに　不通る．ぬ　ざるべきこと
一ものうちを　ほの心いき　この
簡つる程の　ものゝ　れ　ゝ
ますべきなどの　ものゝ
ハ通るやうにものゝ　一ものいけう　内教し
一ものうう　朽　一うんちぐ
ものゝを　狩　仏　ものゝ
そゝめぞ　ものゝし．天．ゆ　仏

国立国会図書館　タイトル『源氏物語』　請求記号 856-10
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『源氏物語』　請求記号 856-10
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『源氏物語』　請求記号 856-10

ガラス使用

ハあひてきこえさせうちすてらいまゝ
居ぬれバよくもてつらあてるし
一うへ〳〵そはまうへバ見うてとゝみ迎
一うちもき 褂・大あこ・褂ハ・こ一のへき
あろ〳〵なゞろあめこ・さめのよて書有
そよこよ小褂をそろ・すぬハ給有にう
ひさろいをあろよし一うけてゞはよ吸
しのろふまをそう一うへ〳〵らあろ窓
のふをさあゞ〳〵うへ〳〵とりろうし
一うろろふんらさ〳〵添のろへうろ
ゞりこ乱をし一うちあくさゞんゞ
ろさあのろれまる一うあ芸義人名実多
世義人とこいそいれと芸義人は
家あうもあろ〳〵ろ参し
一うんあのへん花至ハ中のこよ五芸
あろ参〳〵・ゆろ下のきまる参し

一うへん坂ゞ一うけ芸ハ空ふきこん
あゞまれ原まそよあのゞまうるよ
あれてまあろんふのへゞいうよ
まぬやこうな迎一うれまゆへ・ふの
人氏あいろまるうれまめへ・
いまゞ溜月そへまあ空みかち
一うろへりんおへのろ四花今集・意妻
い時のゆへ新褂のこよ・新褂をる・
ろき・りんハ窠雲しあのつひよハよの
褂をいまず・お給よいてへらき兵褂し
一うんつま院河雲指洗ハ深和の罪
家信門大皇さ四男一なあ
一うゞざ自そてうへゞまゝのこ・
うへ少なれハ犯就し
一五をのゞうの系人右近至の系人
中ゞ位行おゞ旅・位ふおるゞふし新番

国立国会図書館　タイトル『源氏物語』 請求記号 856-10
ガラス使用

まづさよ深潭君よ係ニ絡ル花ヲ付テ
つれづれ　一條院御時ニ宣旨ヲ
ふさわしうしんやうに宣旨ヲ明月記
云雨脚動地雷声　此今表ス
一うちの中のつぼうちよ　笙ノ笛ヲ出
月ニ吹ニ琴ヲ　琴神ノ出ヲ
ありせちうしをあうしのみこ
つてけうじ　一うちにほす琴の花
仁和寺ニつく　猫のみうしの指ヲ
うちひせつる琴ヲ　海ヲ
神ヲいのり　又内裏ノ
そてまつよりあれど　琴玉ヲ
いりんよおほえ　八雨雲ハ如此
一條院御時ニ宣旨ヲ
方士ヲおくれヲ求メ
聖霊　下着　ヲ

一うちのもゝひ　打ヲ始テ
打ヲ　一うちつけの
一うちの女房ノ
よの女房ノ典侍
ちりハ右ヲ
一うちの打よ
の打ヲ　馬鹿打ト書テ
の如ク　ヲ
なくて生ル打ヲ　一
打ヲ　一
一うちすゞ

たゞくずしうたを　一〔行〕よろづのことゝすくや

声ら八郢曲（エイキョク）のことし・ものゝ〔ね〕八楽器（ガクキモノ）也

事也又よみぐさにもりしあくがれしやすきこと

一催馬楽ぬぐうの　笛竹とハ・箏（ソウ）琵琶の曲のこと

有のうちし　うすきにや花をし　うす花田（ハナダ）の色とし・

うらあさきるとハ唐衛（カラ）の事し　花

白きにやてよわうきゝ〇ののきぬし

一うぶのはしのゝ名　宮〔様〕が〔琴〕・和琴（ワゴン）

ノ名物也　筆作（ヒツサク）也一　うちまつりの人

のきゝうをまつ〇びて　〔紫〕ぞの八〔面〕（ハジミガイ）の

ゆゑとまつ〇びて院の門より源氏の〔院〕

方へ〔内親王〕をかどをちこぼうし

一うすまん〔とすぐ〕一内よりゆかさやし

あひ宮誕生の時ハ父の院門よりもらふ

やうすむの御〔分〕（ブン）也一うへ〔後見〕の家のいろく

けちめきて　河〔羅〕〔日〕〔對〕　五位六位〔編〕〔袍〕（モモリバウ）〔言〕

一〔よ〕うらゑくだりにこそし　みさきのはしハ

さほゝ出て・はぎのうしろにかゝる色

一うちまつきかどし　来（ヨマ）とまつ八・今も

まじかゝよすうし　一御儀（タヾコリ）はま〔新〕

のこゝをとうくゝにおきまくゝり世〔中〕

かゝり・〔給〕とさて〔あ〕へらをハ惡〔御〕・〔此〕

〔親〕〔あ〕すや〔給〕の子〔語〕見一　〔行〕うしとゝよび文さし

ますらいま〔へ〕もかゝとまてつれなうし

よの宮てさしまさるし・〔君〕がたハ・天の

〔君〕ハよ〔あ〕〔致〕せり〔後〕一うしすか〔宮〕と今〔世〕（リヤウ）丸

〔為〕・主君父母夫服（ブク）一年一〔行〕〔約〕うさ〔事〕よ八ゆさうえ

きん八かりの学の〔心〕よ・〔宮〕〔や〕とりまいり

一〔行〕うゑゝろ一所（ミ）〔此〕はの〔後〕〔他〕と三界よゆ

〔か〕りあらし八二条院・こ八おち条院之

一〔句〕〔宮〕（ミヤ）うつと　〔生〕（ソウ）〔婚〕姻の〔道〕一〔新〕（こうじん）すゝひをひすゞい

〔い〕〔ま〕くし　一〔所〕（カハ）〔川〕〔宮〕さも　〔宮〕〔入〕〔節〕　八二

源引 まの源氏 草子に掲面 当れる
一うくひすのこゑ ハなの曲 ハ多人朝く
一うちすてゝ けめぐるものまとうみのうち
うのは安野のこいる安まうらよる野のさ
一ゆくりなくうち ゝめりとうねりかぜを
うぐひすの 声奥ふかくうしめるさ
一うくる 秋の秋野るとうち
一うくる春ハ 雪ハ山おしてゝうくる春
とうぐひすいるの ゝくくとし
一うぐひす 御宮天皇三年二月 天皇御
位 内裏 大学寮 献初釈
ハナ枝 朝のさま 初秋と同じ年
中の要礼をみる 秋を服 行事年
行事二委し 一切文 同宮
一うぐひすの 舎人 うぐひす

うくひすのこゑ ハなの曲 ハ多人朝く
一うちすてゝ けめぐるものまとうみのうち
うのは安野のこいる安まうらよる野のさ
一ゆくりなくうち ゝめりとうねりかぜを
うぐひすの 声奥ふかくうしめるさ
一うくる 秋の秋野るとうち
一うくる春ハ 雪ハ山おしてゝうくる春
とうぐひすいるの ゝくくとし
一うぐひす 御宮天皇三年二月 天皇御
位 内裏 大学寮 献初釈
ハナ枝 朝のさま 初秋と同じ年
中の要礼をみる 秋を服 行事年
行事二委し 一切文 同宮
一うぐひすの 舎人 うぐひす

一のちの日 ハ月の日 大内の
一のちの日 ハ月の日 三月 行幸の
一のちのまの ハのうれしつまの日 行幸
一のちのうぐひす 行幸 用
一のちの日 ハ月の日 大内の
一のちの日 ハ月の日 三月 行幸の
一のちのまの ハのうれしつまの日 行幸
一のちのうぐひす 行幸 用

西二月のなかばすぐると。三月近近り
也除館三月も薦も女院の御忌月なれ
ば。みな人し　一のかりての世あかりて
の世にも同じ事達一のかりもしなまの
御景を同じく姫君なん御をとし
一のかりにし。のかりにし。いふ御の御経
のすれ。彩なく。ぬくもりは釘也。は
世をあはる事を。おもられこそでめ世の心
一のりられてりあつ　春なりをとるなり。
礼記よりとれり。正月　賭らりて勝る
くの大和国相にして。遊藝行りし
時。夕暮花大和大臣まて兼らり
一のともけてしも　行幸　事勤
一のり物　勝負の色輪こそのりの物
さまあべられとい女二宮に御すと
のあし　當蝶よ寸一の　世の心

菱のくさり
一のりにて　修行をはりの師しなるして。
それにりめ　住吉まで行く御ため
一のこ　御奈し　一のりせ　ほとも世なと
そも　侍しせるさん　一のかあ　も勤する人
し
一くつさあやあ　内教寮　納殿　立後
花円より御室をもむかし　おさめ為は
諸国より参る物を納むるところし
一くるあるを　退出の心　類　河類随
一くあけめでりてありとおもくあぐるを
いと也。河前は女御更衣の常に都を
あくる事　本家と　鉸叙あるし
一くもの事へも　禁中は御世よくれて
月を御んずるより女官たちおさらに宮
の月は。みなそうかしとのんし
一くまのおや　歌　国母をこつる事あれ

ばかりで。花園のおやしきの六条院の
太政大臣のそのぼをそのつぼをそうり
そうぞうれうをつくるようすのおもしろさ
あつるしおもやけのいろうめもくれ梅の開
白の天子を補佐してをるまこと源氏
そつのよそをそのりしうがおやけ
のおうあつのいそのおこうそし
一くるんさ 寝殿しんでんに張するくをそこを
そこ事こうおもき一くるんくるまい下屋
式の廊おもよて後 一くるまびする 一面
あるしぐれずもあるそのびし
一くるくるひ様し 一くるーうんくるくる
一そぐ池 築山 様し 一くろぐろ
あるしおもしおんよ実うううつはし
やうのつするくぐろよ対してあるなえ
どけのいろうぐせ一くびうそーうの

りげのおもし一くのうー 袴の腰し
一くろものして おそそをくろうろ
一くれぐーるにぐれぐーこれれとうの心
くれれ日 一くろぐし河細砂
一くろうずこい 一くろうそく 寿届し
いんぐくよむ一くろう袴 文
一ぐうんう 契文 花 重明親王
百第氏四年 九日 新文 消 相 朝臣
見文料生者 風 撃 球 梅檀
之 烟 香 紙 来 天人 行 逢 五菱日
北 新文 を 包し 一くろ人 うろこ
うろうそる 尊を 賜し 五位うろ 尊
位の初し 花 菊 くうくる 一夜 日本 其
ふうろぐ一 二月 五日の 叙位 六位の 蔵人
八位 外舞して 従 五位下 叙せうて
まし 私を 義くうりようみそそうろ 迄

国立国会図書館　タイトル『源氏物語』 請求記号 856-10
ガラス使用

うちうちみどころもてとそ向し
一くるつとて功しこうしへくる声よりり
一くるくるもり雨林岡一くるくるもてる
海きあぐ〳〵岸ドの向しかけをとそきき
いきまぢたの心し一くるぬいんおつし
くるくるくるくるくるあもきみくん
そくくくるあもき一くるとれて候治
騰女房楫をす事本文しこれもる
めくしみすき神し一くくやくぐくうて
一くれるねうう集のもし紀文のもそ
はるの上のきねし一くねくくるくる人
一くるものぐ一載き事三平輪
共二載そ着居輪くる帝二而為輪
く所凌し一くるもうくう
あつひいあくあるぐうくうて。こそ山来色ハ
ましればくるそくくる黒汗移

女房ノ服着為之一くるくるみとくるも
装束クワンザウノ色黄色し服着てくるもる
一くるろのうちぬ枝のつ尽る本をとし
一くるくるの神あぐうぐ〳〵宮ノ心よ
ていなくし陸の船をえくぐんとし
一くるくる山車服着車し板車走を
一くるぐ〳〵こて黒方裏をくるあ船の通
一本ノ舞とくるも陸い流れそいまぐ
うて陸ねとくくうつくるぐそそ
そへ陸ねとる事し出所ぐうりこのくく
うりくくるる海を恵のでて着
のへになるるとそ陸ね流れをくれ
しくるて舞役の垂衣をきのつとて
うう。所流のくとぐ必え陸れする事如
陸れぐうて陸ねをくあまもも
それいあの性ぞにうるし陸ねの陸ね

国立国会図書館　タイトル『源氏物語』　請求記号 856-10

ガラス使用

一やうやうなりるくるまつ、御ぞ、御ぞ、
しるべとまていそぐ、神ともろともに決
い無まし
一やうやおもと同じ
やうのりのこし、無文無紋の同じ
やうにつゞくるもろ、去年
のの月を、無文のにぐりよを
おひくる、無紋のりよりて、
御ぞともあまた、一つゝ、薄日本記
士二座、燭五、僧よろびくる、
一ぢ、サのおもりの程、要ある
遷大宰帥ニ安和二三月廿六日
一三月のつごもりよろこの日
初のしめる上巳を、曲水
上巳桃花水下の時よ、飲食の晴、
後漢書、禊除不祥、
一ふぢのひぐるよ、山ばゝ、
芝のゞれて、森よりて、垣ゐ
ゝゝゝ、
一やぶぐ、菊花
一山人のおゝきの、文選、潘岳、笙磯
曰、棗下、棗々、朱実、雑々、事文類
聚、おもおもし、都、老方、日之上の名曰
臣賞、游梅上、見、安期生、食、臣棗大
如瓜、今棗おゝきの、棗の字
一ふくらいもろくれ、山ゐ山人の好を
ゝし、伝毒、造文のあんとて、十月よ、ご
参ぬ、それも、私人のくじめをとり
一やまゝゝのくるゐ秋の表を、万葉、
云、天皇、詔、門太良、野原、競憐、春山
万花之、艶、秋山千葉之、彩、時、智王

山錦ヲ判スル事 秋山の事まふさんとてそ
りみちやまひとりてそこのふ 異なく
一やうつくしそらごと 一やくよんなをみな
みなきよし 一やまとうた。秋雪
のめありしにするもと 一やうつくしの花しけれ
まつたこござれ 松梅 紅梅ハ同社
河妻 紅梅ハ八幡同拝。紅梅ハ 鏡が
神功皇后之
面白ク。裏青し。表ハ卯の花とよし 一柳の糸桜。柳ハ
一やましなの丸ハあるを 花の乃
わそうすくなきをやさしきとよし
一やまうき 恐やましきと 一やまとこし 和琴
のみ白梅し。されば言ふてハ。和国乃
とし立つまや。又そへてとうれ。和琴ハ
結六十すぢわり 一やすぐぬるぞよとそ
太政。納言ハ下り。弓ハ箸と覚すべし

一やさしうたづしきうしかくしとぞやさしき
ともこぞうよみぞも 一柳の下ぎぬ 唐同。
素子よ着すとし。下襲のうハ時ぞ
しもよしぬとりや。一袷 下襲の文やら
にかろし。桜梅ハ十一月より春用する
表みゆハ柳と号す。夏ハ糸ひもとう 同他
一柳の葉をとりふびあそてつぎ。史記曰。
楚ニ有養由基者善ク射ル者也。去ル柳ヲ
葉ヲ百歩ニシテ而射ル之ヲ。百発シテ而百中ル之
左右観ル者数千人。皆曰ク善ク射ル
一山あるますわろ竹のふしん。賀茂臨時ノ
祭ノ舞人竹ノ文青ヲ摺ル袍。蒲萄染ノ下
襲・地摺ノ袴・合袴・陪従ノ桜摘文青ヲ
摺ノ袍。柳ノ色ノ下襲。白ノ練ノ袴・合ノ大口・赤ノ
紐ノ半臂緒ヲ引ク・等ヲ。各々用付ト云
巽ノのつぐき東ニ遊ひのおさめかしや

一柳をけづりてつくりたる 河楊柳と
白きをいふにや 略抄 草のもと青き
をいふなり 一[illegible]陀の[illegible]源
氏の時に成て定 負 保 親王と
云へりそれを桃園の式部卿と[illegible]
説 [illegible]
[illegible]の[illegible]の[illegible]より
一山がつのまがきと [illegible]
まじき心あると[illegible]人[illegible]
そし[illegible]の[illegible]
一やらんせず 遣し[illegible]
一山[illegible]山の[illegible]
一[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]
[illegible]一山[illegible]

[illegible]ぞ[illegible]
[illegible]ども[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
一やどり木と[illegible]
[illegible]一[illegible]
[illegible]
一やどりき[illegible]
[illegible]
[illegible]
一[illegible]秋の[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]ありぬ 不審[illegible]

国立国会図書館　タイトル『源氏物語』 請求記号 856-10
ガラス使用

ま

一まだらゆき　はだれに雪ふる也。斑よむ
かゝめくへし
一まうけの君　儲君（チヨクン／マウケノキミ）
一まうハさきなる
纒（マトフ）　一まうのぼらせ給ふ
参進（サンシン／マウノボル）日本記　参昇（サンシヤウ／マウノボル）とも書し
一まさなきことなり　さがなき事と同じ
一まうでき　まうづる。まうで。まうら。皆
参へまゐる也　一まどはかし　まどはして
一又いらせ給ひて　いにしへ女御の局へ行（ツボネ）へ
行くを経て道をいりさゝるゆゑ也
すとも曲る（?）
まかでし　一まくらごと　まく
ら詞也。これは古き（?）すゞみかふらく
一まみえぬ　まめやかに　一ましく（?）事なれば
源氏中将（?）也。中将ながら
とせつきへさるらんすまそうくらう

一まれまれおもひかけず（?）さくらへ文字
（?）かたよりとをわけもすそとをり
一まほ　まことのかた。真帆（ホ）しれまする
帆（?）かけ。真帆（エ）とかけるなる
一まんな　真名也　一まさきとれへの
一まうと　真人（マウト）わかきことを
一まうらうと　寄人（キヤウジン）一まろ　我をと丸と云
一まぐはし　枕上　一まけずさて　燈（トモシビ）の
かげにひとめくはしへの目（?）たきさくまり
一まりこく　陰陽師（オンヤウ）のするわざなし
一まさにながき夜　八月九月正長夜　白氏文集
一ましらひかぢ　厭術（エンジュツ）加持（カヂ）するの力
一まこのはしらおりより　身のやうなる袖
一まことやむかしの（?）むかし源氏物語
（?）ことはりてなにのひきいにしへ古詞
まかりなかりそのうしさるなどて

国立国会図書館　タイトル『源氏物語』　請求記号 856-10
ガラス使用

一まつひ人まづふでもと一まつぞくくゞくふ
御膳ありて人々ぐ食ち一松乃雲のことおぼくり
貞松彰歳寒ともに貞松の雪も凋
ぶ松の柱のあさくり如意一まん不けつ・緑言
今想ひて百年の御車を同しまず不老・
敬自ハ入こそ、為り如来の光をつくさじと
一まじゆきころまいひのく 皆上ハ母
うさく病・般若中なひてあれバ三月の脈
と・一廉心まして・滌脈の後も志づくへ
うすもの飾をまのまへ・まづくゆきさらさ
とは紅桜りえくさ 梅 桜など・ゑ
あるきぬをとて一まうつ まかぶり
たくかのふちなどくろこおちのへうる
一まうりの稚 祭とひとへ加茂乃
まうりのこ 一まつり いとまご
ひをするをとこ 一まくつをそぐそく

迷不逢恋 歌枕穣 白楽天
一ましておちとまらめべく御ゆかしける・
くゞのあとひらく さかすると中まて・
為宮いまして源の不る露とありて
もありくそぞし 一まくあれつらをて
言為也口役・まくさ総ちる 瞬めぐらす
まり摩手足那役 日本記 一まろうれるはそて
いくく紫のうへの髪がみくらにもまうく
れるをとこし 一ましり 女 日本記
一ますや まてさらしちょ 塩が海し
一まくてき 瞬し 一まんすへくゆくら
すさく 西宮樹に端午日・舞人起
左唱百春楽・我白皇姫祢佐仙齢・
百春楽・延宝文庫 年光・備る楽ハ 湊海三般
撰てく多氏 お像うし・今案百春楽ハすづく八白の詞
しぞれを漢ちるにて、ものぞ・旬じよのあかひよ

国立国会図書館　タイトル『源氏物語』請求記号 856-10
ガラス使用

百寿をならし。諸宗の学人のさかさき
ゆまひのすむるを。源氏の君の口すさひ
しのかくしきびしく二句を書付たり 花
一又しらいまて 通は一句通は字のちか
まんなの すゝむるかうよ 花まんなの
すゝむるは。すゝして。筝に手
ころをうそれは糸もみだれさるを。その
やうに手すさびにてかけ候へと文字
すぐに書つる 一まきうねさりし
実家をも落そとなし。時雨曲への書に。
契り一首二首ふとかさ印も有る莫なりが
えびすてるや 一かたしねまて
猶是し時雨の道一まつり比へ心がけてから
許も納受しかしの集の上の句を
一なのきいしと棟梁とり神の仏の有千手
截早の御幸し 一まりつらく源氏よ

時宗のらんそへいば紛那の出儀
しかゆえよりまで。常に寄るのとし
一まうびるさきの 仁和寺の本尊は大日とし
摩訶毘盧遮那とは大日を申し
一まうつへくしく 行人の眼ざしの
おそろしきいろをとり。河まては見。
つくましくいかにしも鉢やかの心乱ゑ
一行行を山 都のゆめある名残し
一行旅のあさみ 衣のうつらさかれて
身をゆとりつすとり。されどもたえ
めぐらうかづきくゑとば必ずうそ出しへ行
一幻のまゝとう節 暁し残灯背壁影
蕭々暗雨打窓声へ。白氏文集
一行のひらをすゝ 仙人王喬。会稽松子。
不飢寿百七十余年。すいの入る心
一摘まくすゝまの 金ゆかしかれて

国立国会図書館　タイトル『源氏物語』　請求記号 856-10
ガラス使用

一まいでこと　これにそへしまつけるを
ひとつのさかづきにそへし
一まうさぶり　木の枝よりこちの花を遊（フリダチ）　杖梲（ズハエ）
うちてかづらを枝よりてぬかり・杖梲
和名泰苅布利（ニタブリ）　一まうさぶりぬ・ゆりぬい
ふれぬし杖梲よそへより・結こそをん枝
にそへより　一まわりてそのうらみ
施給荒とりて蒼給ひり・荒をゆかの
けやりれば京の月おもちとし
一まうろうる　円頂（エンチャウ）（ニルキテイクベキ）　法師し
一まあへ人もなくし　一まめくさに
一まうく数　狂言（ニカゴト）也　一ますちさんちち・左更し　尽く数し
一まさぐり・うきさぐりいづれもりて遊
け
一けうつりの衣　比参議（ヒサンギ）の三面位の
さかる女ぬで・衣をとミ候に合（ワカチ）

きよにとりては桐壺の更衣は中の子を
一けふくしむべきいのりとも　更衣の
宮まで母をそう　一けちて　あひいろう
心ずかへてもちやす也　一けうあらるる　思ある
一くしなげき　ざれことをもち・その河よ
つきて心ときめく也　一けくしい　気（ケヒ）　日本記　形（ケダ）
一けぢめ　何撤揚　一けさうぃあらぬ
けすこていあらぬし　河　不二下習不（コラスクシコハ）佐
一けちうさ　気近（ケヂカキ）　一げらう　下臈し
一けうそく　脇息　一けちさす　草のうかし
一けさう　懸想（ケサウ）（ヲモヒラカレ）　一けいめい　経営　ちびろうき
をそれるらし　一けうとし　気疎（ケウトキ）・気味（ケウトキ）
一けおそろしさう　気おそろしさし
一けそうれぬる　気をとうつく
一けしきあるのもあし、くなれ
あるときゞうこゑハうつぐしき声やし

国立国会図書館　タイトル『源氏物語』 請求記号 856-10
ガラス使用

一けうらにもひろうよみちめる源氏や
なとけうらにいつしかひろめあはうる
一ぜんうるよなうひも 諺言し 物なれも
ぐめまてうる日 一けうりけまる 桐
とものりいづるをうちうるやうし
一けうりぐのよ うめとすもめしえ
一けうや 清方 一源氏のおもやけこと
源氏新色うら絵源氏物語 北斎 源氏
一けうく 歌うの葉 一けうめど 秀
一けうをうちうるべき 新をうちうずきめど
うが如 二代歌川豊国 うふいうの図いう
物語 源氏 宮遠八世月六日 綾
するし又花仏そうぐ物語ぐできうる
と図で 天のの物語 うめうる鬼
一けうちうるやげ 挿春 うる 次第
一けうをし源氏のよついせうをよの

一けうめるものりえうて 箱林人 出
もするし 新のまい切 新として 何をも
うて 新とうるとうけもう 又もの中に
新として もの立文なの中 平声字
をて 新とするものを 又仏新そて
仏前の心まよれけもあり
一源氏のうちてうる仏 前の中まの
の投 帝王の出 源氏の姓をうて
おれしも 帝王家王のうおぐ源氏
するし源氏中ぼけ一けうしそれ化
物をうつうめ一けうをうれやう
うるれ 源氏物語 一けうう 新代おれ
うめくおうるぐおうるうる心ぜをれを
一けうん 高校 ものうるうるうて
一けうを 書やんし一けうの人めうと 若文
読い有名の文衛いし 読恵連 詩二ウ

国立国会図書館　タイトル『源氏物語』 請求記号 856-10
ガラス使用

省もまわるそうなりて紀家又
きてんとする歎のみし船出とうり捨て
よそかうそのうちぎぬとそぼとかるる
捨川よすみ住うそう中さあまりて
うりしける有家紙一まきよそうとうえを
知らせまれるさとこ一つづうのびうりげる
花詩を拾遺する時、家中にそうろう
文章をうらやみ、文人共
い潤色よすみて、後頭するし
一家よえんーのよ花ものやけどし
うずうつ、たちの亭にて、なる
のうまこ、又天禧三年四月十二日兎省
舎花苑あり、和哥管絃あり
一ふさりうず不祥とうへうる
ありさ拾遺に今家
こうまうり 一
長恨歌、唐本多有、琵琶行、全家実ともり

呼良民文集并十二唐本引勘所ゝ掲
故今家誰ともうなし白氏文集七六巻
一ふらやうりつる不学しし
一父主のよ君主のおうそう史記、劉
学家、周公、能く称句よう、成王よ何
とうのおりんとすんとうるいたくび君主
周堂の王位のつのその如くのくび君主
の後、成主の位よなのつう、其よう
動作をうずうていくそ、朱雀院の
脱屣あーば、今上の位よなのできる、
其よ朱雀院の位よ、冷泉の位よ
位よなのつび、お墓するやうなりて
て、成主の位そのおりんとすんとう今上
の位よんをうりうさとうる、釈
文主うそ、君主うそ、成主うそ、釈よし
位ニ天下ニ而不賤矣

国立国会図書館　タイトル『源氏物語』　請求記号 856-10
ガラス使用

一文集　白氏天の詩賦をあつめるし。
七十二巻有。其外雑の集ども
一うちのつゝき　若菜書司
称唯　仰ぎ千巻良く万の礼
書司。則飯粒女　和琴一名　置くは著き
今楽。地合の拍子八少し色あり。書司
八女房の名なし。和琴をつゝじるひくら。
和琴ともやがて文のつゝきゝそし。そち
めいやうのはーにてつゝひくうおやうし
一ふるさゝにうくゝの　琴ともさえつる
ところ。今うの切えて琴をひきやめぬき
に。御もきゝわくゝあしとうゝきもり
一ふけんうう　普賢菩薩　仏天のつげ　つゝ
く奏ーうし　一そくつけられ大き
やうなし　唯力をのるさゝあし
一ふえのまにもうゝこゝろ向ふ期思舊

賊帰り曰。隣人有吹笛者教声聞
乱迎想影昔遊識ね　文選
一ふるくゝ人も　なほ　急か回うよれゝこゝ
をきく多し　一ふくこるくゝ。ゆれ
ふくいきこる　おのまやめるあからにし
一みぢのわそうが　せれ的茶もうれね
一ふれでし　船し保うつゞき　甘のそ
一かくつけきもぎ一ふうこゝにいて
玉いたらはの経し。ほのまいても。菱の上
のまるし。いれまてもるれねとのまう
一ふんせゝますもあ礼とそう　四方兵
紙いあやうくうよ。文書みて面礼のよ
ーこゝもまるあこれのうろ。
もあ礼とそふみてゝやまうし。
他人のれぞるよ准じて礼とうそゝた。
今のゝるもあ礼とそし。ふがー

儒ろの数をつくし　一ふせうぶ　ゆりやけ女
敷王　大臣　宰下布施を内裏にはらず
おのし　灌仏の布施よい　有八縁を用
ふることと　中ばら　紙よめるし
一ふくろ　ふくろのみくる　あさきくいく
一ふ　浅黄　六位の袍よそくいう
一ふ　衣よもようやつれの　服衣をもちて
一ふくちのそのよ　奥へよ　小守を不用
ふちうの弥　礼伝ふう　芒種の指と
浴てすは有とふ　一ふていつめくびう
語し　河海二琴の譜のう指　あり聴く
一ふ　じあて　物ふを封一数る　祈
祷着の指し　一ふうぐうう　廿三后
よめのても　問ぐき　一ふうをいくんまる
源氏のそずふうも　廿三文のそすが
終止とし　一ふうめき心　知風る
心ぬとし

一ふくろ　あれおられ　花　琴のおよる
ありよ　句をしふうあし
一ふえ　竹よみさふう　指求等のふれ
ふく　風よ　易てすうつふれでし
ふうぐい　かし　音律　八治声の
相よ付て　吹つふうふむべ
一三日　みうふうふむべ
一ふうんれう　演後　唐綾し
一ふくま　数数　扇を文にてどり
て　数のて　餅よう　てゆでく　耳菊と
ふりて　ふまりて　ふそさ　行のつて
其中へふくそのて　ごべとふてつまむ
して　そ多の六の御子のごくまうむ
ふうの物よ　五く　一文をりのふ　文和
ふをのて　聖ふ　物をなり　給う
一ふうふれ　ぬ天ふ　句とふよ中と

国立国会図書館　タイトル『源氏物語』　請求記号 856-10
ガラス使用

いふことそふみするめでし。男のひゞきにて
不付といへし　一ふよう 不用・不通(フタウ)
とおもひやるべき　一ふかう川の 江南の穴
よくは兎紙むかしの此あとにてなと
一ふところがみとは ふところがみと同し
一ふさいのうし 封書(フウシヨ)　一ふかう 不幸

こ

一こしあるみち いろめしくちさきあはぬ時に
一こゝろくるしき 此言半過(ユキクタ)[illegible]　[illegible]の外き
あらそはれバ常の[illegible]まちかさし
一こゝんだく 心業(ゴウ)　一こゝろざし 心操(バセ)
一こゝろきもつくるやうに きものつぶれ
とゞろきて　一[illegible]を地として
[illegible]は。[illegible]人とあらハなるさかしき人の道
一こと葉 言種(コトクサ)　一こゝろど 言[illegible]人の道
一こゝろえ 花鏡(ケイ)[illegible]の言書(ゲンバン)とハ[illegible]

法師まうしとのつかさとよみ玄(ゲン)信
蓄(ゴン)ハ寄(ヤリ)し 信居といひの。肯百[illegible]国
より来るをしゆへてよ。蓄宮と同じく。
此[illegible]よつきとかし。又[illegible]ハ[illegible]の
[illegible]と[illegible]の[illegible]時声をいふすなと
あるよ。[illegible]ハ声を[illegible]と云ふし[illegible]
人[illegible]の時ハ画事といふをさして
[illegible]国のしるしをつくるゆへし。七条朱一
薩よまうしとし。然ハ今の空つるといふ字の
あるとし　一こまうく 今聲(コヨナウ)
かあるる泡し　一こゝさうのん 穀食(コクサウ)[illegible]
あさかおの事し　一[illegible]あてをかりし
一こうちまうりきちなどいへはまうりとも
ひとりごちも独言(ヒトリゴト)　一ことえり 言撰(コトエリ)し
一ことゝ中に[illegible]まのゆこし。又[illegible]中にと
りかへし花よしまる[illegible]あり中ましし

国立国会図書館　タイトル『源氏物語』 請求記号 856-10
ガラス使用

一こわざとて　臣のすし大やうの物し
一ゆづさゆく　やうねこ一こしくしくこいこいこ
よつぎこつろせこ一ごくら　婿迎　御
良女の娘そし　一こしく人のつくんやう
いろこめこたるあ人のいこんやうと
中ねのく浦氏のそをいひあふこしごうう
一んこしくしんづしひおこて　良
一こやこわやこうこ一こしくあるう
一許このねも　紙つきさく人こびこやい
川そめあつくうつまも我こて
亦氏紀ふともあこてこやしまれ
そうこるれいぬくますの伯し
一こうれがこ　詞のう詞も亡のこと
くくうれを　一ごくねらんごう
やくくぬちへ　その暑れこ第実
ひくこと如し　暑れとうねし

一九日式部　宣旨高ふ・天皇南殿よ
出御あつく・内弁か弁　等あり
文人博士をめして　題をなしめて・
各賦のそをさぐりて　詩を作て講
ずるのあり
一右馬のこ　中将
まてたまうとなう人一こことあくれい
こぐくあくの句一ううこを結　博物
志云　造二閻魔一者一こことあやしのよく
女房の装束・四月あのようへすし一う
ひのうさあてひくくこうこうこれあや
いうちこ出ぐ一花ここひこさよ
涼こここう　一このてうのもこの
あのうこのあも　一こぐこうなる物よ
こぐこうんこ　かこうこめこう前し
一こうのこう　のそ　よふ上生のう
んあてよ　花々ぐい女のわぐ万よたよ

国立国会図書館　タイトル『源氏物語』　請求記号 856-10
ガラス使用

其六年の四月よりみちのくへくだりけるとて。
糸のおほせ命旨を擇て又御禊のうち
則業平の野宮に入の給ふとて是を二
度の禊へらるべしとて中の酉の日嵯峨
社へ参りて参りけるはらへ毎年の
御禊ハ必年日られと術てりし 上略之
一こさあそびのうち 花田よ車との
すわるなると
一ことさそよつてらいわ
うらんやうし 花 三秋未映之儀起
雑二明之天別緒依之情出声ハ竹も
之恨遺逢郷時にことさらよつてり
一ぬがんのまずやう
出さんやうし
護摩壇御修法・降三世・軍荼利・
大威徳・金剛夜叉・中央不動
一むらんの日法花経二このみより狗賊死
細骨死 細骨をすゝるたぐひし。狗賊はぬき

そりて寓し 一うしのづて 花 鸚鵡
蕭ちん人のおもく出来るをとうしなのす
とらふし 一こともそ 謳歌
日本紀にもおもひも恩にうりずまうるれる
一ろりくことよ 花 そこよい依境をとらり。
ふるの秋のうちもちにまよりて常世
をとこり為い中国の世にあれうふ将に縁る
すれバかくよみたまへ一ろがありてとくての
お節のんの難しよひとそぐめられバ
はすまを比ふまこまずきざさいける
まじきしと紫式部一胡のくまもこり
くん女 花 王昭君ハ胡国の王よ嫁せ
しまい何とももきまかれバ非ありて
をてるするに不及こまい我が人命ぞ
をうの去国へやりくいべいうらの
まをうさんとつれぐのあそりよいま

花鳥ニ妻。棲霞引江ニ江しつてらし樣前曉
八聲ノ出雲。はまちのまかくり。清涼寺ハ
東の河原になし 法橋上人奝然ノ建
嵯峨堂建立ス 一ころもさしげの
少將付判事。判丸を羽のすさとりまさて
菅根あハ帥をかつて付し。菅根朝臣
葡萄の枝のくも付し。さすいからと
褂ハぬんどうるもせてしら判事てし。
一ふ侍づるのなるときそそのあひ。
花宴 物節ノ云ハ。近衛の舎人の
中よ東遊するを物節と称す。
その中に番長府掌なとします。
そによりて花の条。かくの條の
羽林。東遊のと来十人めしくれる。
物舎の近衛。求子。駿河舞なとそある
とつらむる也。陪従ハ府生の中なり。

さのと用る加陪従ハもとより東遊ならぬ人
し。陪従ハ和琴笛など吹ものとるし略也
一られやりくしき。やかりくしのさて
一故式部卿の宮らいまハしてさせふ 大鏡云
三条院の御時に。修よななんとおがり
けるに。内より八式部卿の御子の修に宣旨
賜りければ。宮父式部卿をと踏歌の大臣に
おしてそれ。修ひとてさせあへく
一とをとるよ云ハ 史記 明君知臣明父知子
一五節などの 源のまとて式部
に。惟光ら出来させし 琵琶引云源氏君
ハくるのかまや。一部子宮もならぬらぶ
よろ人にうけ給へる。人数。文字詠作ハ。
国用ひかへて。笙を内裡の内ひとつ給し
一これけぞ うまちさきついてに細の進
一ここあまたのまちかり 江 甚く云

本文多く悉く一つの書くもの並べ書
きもてゆくにいろいろれさまざまにもとどもし
一こまの物語 物語まにまにも物語のみ
一このもの物語 一こと つくさ
ものさまざまに書くしよくめでたくつひ
にものくとも本さまり。 三段あり
ものの。さしひ。 信光 五巻心。うつくしき事
一こそ海べ 一のうちちさまざまに物語
一ひかりをり おとし 光源氏
一巻のつかをんざいのそんまき語り
中納言のかぐや姫 一うゆひ ものかり
をて婚をりやまき 一こそらのみけ。古竹
のみけ。曲物 三人をさまざまの人も物語
のうちをとらへ人をこと一こそうざいうさぬ乃
うへのみやづかへ 紀伊の局 織物の組物
女のさうぞくいもうとうきめのうぢ

一こと ものがたりそうこの製来とい。紙
うけ 柱つけそうぢ 一こんありて風ふく
ぬぐふんありて。 ゆうて吹らむ
なりと。そこも 蓬萊の山の心
一こまのうへ 北のぐこまのやうなるこう
紙つぐうつくしくぬぐやうなるし
一物語書 源氏 物語 一巻 一巻
一ふやまこゆぐ 物語 一巻
一巻つくさの使 勅答 奏 使
一巻勅を用うるい 東宮 を奉る 勅
一この 軒の行幸 時 春秋 ところの 春
よ 御 一 冬 秋 好 御 寿 生
有のうちの十月 一 物語 一 まのやうの
書をよろひよろひめてほめ 筆つくものの
一こうの 物語 物語 書ぬ 一 松 四 松
一こまのうへ一やうこ用いる 筆 心 紙 硯 墨

国立国会図書館　タイトル『源氏物語』　請求記号 856-10

ガラス使用

かねよの〻し、嵆伯牙鐘子期とて、云人
友なりしが琴をひきしに、鐘子期死て
後は伯牙ハ今より後我琴を
聞知者なしとて琴のをたちてやミし
しることれを伯牙絶絃といふ
一声まつてろう 昭君が傳の哥をかきしを
と柏木の手なるとそ 一これハそしりたまふ心ばで
やとて 薫ハ想夫恋ときゝたまふ事と
夕霧のそゝのかし也 一これはまふしましくれ
かゝることも伐し 柏木まで上ら傳ふ
名物の笛とし 一このひあくらう
月の夕 三五夜中新月色二千里外
故人心 一これはやう 紫障
一これつゞし 行嗚鄰し
一こともかゝめて やみと夕霧の法
中そのかりての夜のつゝし

一 云名のみあらし 白氏 一このよのさのひ天人
のんれやそのつゝり香し 三十二相八十二ノ
毛孔より香出し 大祖宗鳥初香弥子
まとめ内一室香しまし 聖徳太子も同
一 吹のすゝみや そひすしのみて
一 このまへや おまへまて秘密の丸
一 きくらく 物美の前薬王菩薩のまれ
一 これハ月まてまつて 琵琶ハ撥を納不
を返撥しもの向ひしき詞し 李嶠琵琶
詩云 半月分弦上 一 こひまでとある
くもり撥をもひて まねくとそよ 雪の
ふるをけさうにあらんとかなたに
まりを撥にてまねての跡、宮のうかん
前のまつたえまのある葉のゆふしおとな女
うつくし 一 ゆきかゝる 楊子が
泉法ハ去ハ忘出るれバ心ぞくろし

国立国会図書館　タイトル『源氏物語』　請求記号 856-10
ガラス使用

一えんまげて　さし曲て　さしもさうさう女房
そでのまとそうり　一えひのうくけぐこと
そうり又物の折みじく仕うけぐうすゐ
ゝそ　河衣被香　一えんひそあ　蒲萄を
はなちさしはなれ里をこ一えいうぐーのうえん
年のえてゐる徐曲のうめぐ青海波
のえよ添のう妻　一えいまうさのうる
徐八疑のし着帽の人　表三冠緑
一えひのうーひの洞　白雪天が紹介一蓬
して　三月晩よ　東落うえあよ向て　えん
微うくまるーは作う浮のあし　酔い超
濁渡春盃裏　吟苦ち又顔喰鴨前
一延えのうちりつくうる事　苑
あやくまるぶりの作るこえ　きぐ乙
うの世うるれ出てようるのて仕れえ
出名人うの事八逸乱の帝門うう作り

て　三代よめのこと安　おうがやうりう八
以えのよの第の上すうるる　ふうの
くうり出うるし　女人こうるう延えくうる
一えびぐーして　蒲萄等ぐし　いうるぐ
のうし　うーをるけ出うれべえびて
りうぐーようわりうえるありふ徐第の
数徒　ぐぐーいう　みよくくうし
一えうう　知為　一歩前のすけ　寄け
中おねうえるくまし　おおお第二求おを
まうてし　一えうしぐうしぐ
一えよえて　徐し　一えうう前数しるう
一えうよ　矩ぐうし

て
一てぐうのをて　聾のう仕出うえし
河　聾車八石階のうる　門うりのう中の
童を女人のうめし中うへの聾車うる云

国立国会図書館　タイトル『源氏物語』　請求記号 856-10
ガラス使用

牛車（ギッシャ）は牛のくるまでのこと。花
今案温明殿（ウンメイデン）校庭（コウテイ）をこの中の
の門内のごとし。陰明門（インメイモン）は内侍（ナイシ）
ますみ殿（デン）し東の宣陽門（センヤウモン）の中にあり。
後涼殿（コウリヤウデン）は西の陰明門（インメイモン）の内にあり。
巽（タツミ）の角（スミ）よこうらうてんなり
さまつらひのみ衣（キヌ）などのざうしどもの
うつくしきをおほくて、よつがさねなどし
ておくりたり。延喜（エンギ）式（シキ）などまいて人々に
杯（サカヅキ）などのうつわものどもおくりたり。物（モノ）
のくさぐさひさげ（ヒサゲ）など。台（ダイ）盤（バン）所（ドコロ）よりは
中のおまの門のおもし。陣（ジン）の中の
官（クワン）の門（モン）などもし。ろ（ロ）新（シン）敕（チョク）使（シ）にて
おろしの車（クルマ）。うへいちのさくて。そこにみお
ろすなど車（クルマ）し給（タマ）はれば御（オン）をとぢめて。六
衛（エ）の官人（クワンニン）のやくにてうちそひて出（イ）でさする。

一てうと御（ギョ）門（モン）。一辛（カラ）子（ネ）院（イン）東宮（トウグウ）に望
のぞみし延喜（エンギ）の文（モン）門（モン）などの帝（ミカド）
やしき。綾（アヤ）をとりもちてものみてかへ。ゐやす
まず。紅（クレナヰ）などのうへなどきる
物（モノ）ぬぎてその御（ギョ）ぐるまにうつる。一首
辛（カラ）子院（イン）のいとうつくしうをみるに。
伊勢（イセ）集（シフ）のやうに一（ヒト）てにつくそ
つくてゐ我（ワ）物（モノ）てし。袖（ソデ）をは墨（スミ）染（ゾメ）
みてぞわたりくる。仰（オホ）せつかうまつる。ろ
うかはしつゝ
一条（デウ）殿（デン）。御（ギョ）門（モン）。ゆり初（ソ）めの乃
おほ門（モン）。とうの。物（モノ）見（ミ）のいれず。雑（ザツ）清
涼殿（デン）の東（ヒガシ）の廂（ヒサシ）。諸（モロ）司（ツカサ）あし
一天地（カミ）。てんちときもつとよもぎ
天（アメ）もりまもるべくの。生（シヤウ）天（テン）の堕（ダ）三（サン）途（ヅ）
天（テン）よりもうき着（キ）ぬべくて。三（サン）度（ド）ばかり
まうでぞよみ給（タマ）へられてのよ。

手探(テサグ)りなどして、言(コト)は不出(ズデ)て、
手(テ)ばかりいさゝかもるをもて
一天人(ヒトアマビト)のあさぐさめる、さや雛を作(ツク)りの
ものの義(ギ)ゝえさゝりしものゆゑ
き八月十五夜(ヤ)は天人ののりし
一てんぐ(ヒトテングノ)天狗(テング)とらへ、聟(ムコ)の名(ナ)本(モト)
用(モチ)ゐず、天羽衣(アマノハゴロモ)の事(コト)ゝり

天人(アマビト)の歎(ナゲ)き有(アリ)、唯(タヾ)天人の嘆(ナゲ)きのみ
一天(ヒトアメ)のするゝ、天眼(テンゲン)こ一天(ヒトアメ)でんのぐさゝりに
天人(アマビト)のさゝりにさゝゝさゝりとゝし
一時(ヒトトキ)るひゝ八分人(ハチブンニン)、前(マヘ)のそげよ事(コト)也(ナリ)を
あり、心(ココロ)飛(トビ)りらゝ言(コト)の、則(スナハチ)来人(キタルヒト)今(イマ)ゝし
一てゝあいまゝて音(ネ)の森(モリ)ゝすぐゝ悲(カナシ)
一てゝゝめらち、唯(タヾ)よゝさゝを及(スコシ)六(ムツ)ようゝめらし
一あど(アルヒト)ぐ人(ビト)ハまこの内者(ウチノモノ)
まのゝゝすゝゝ花(ハナ)あどぐ人(ビト)、故郷(フルサト)
ゝぐゝぐ、後(ノチ)の衣上(キヌ)ぐ人(ビト)ちまのゝゝぐ
ゝゝて、千有(チアリ)ぐよゆゝされて、昇(ノボ)
すゝゝゝ、ものゝゝくゝ申(マヲ)しゝ〇ゝ
ゝもこゝ、後(ノチ)ゝゝ昇(ノボ)ぐゝゝる、
ゝも、物(モノ)ゝゝゝまゝゝ昇(ノボ)ぐゝ也(ナリ)ゝ、
ゝぐの使(ツカヒ)ゝゝゝのゝゝあ書(カキ)ゝ
一てゝゝく調(トヽノヘ)ゝ一てゝゝゝゝゝ

856
10

国立国会図書館　タイトル『源氏物語』 請求記号 856-10

ガラス使用

国立国会図書館　　タイトル『源氏物語』　請求記号 856-10

ガラス使用